

昭和八年（一九三三） 絹本着色
各二〇・四×四三・八・〇

昭和三年（一九二八）の大札を祝って三菱財閥の岩崎家より献上された五双の屏風の内の一つである。当初選出されていた五名の画家の内、吉川靈華が昭和四年三月に病没したため、その欠を補うべく新たに揮毫を依頼されたのが錦木清方であった。清方はそれから画題の検討に始まり、モチーフとなる人物や風景のスケッチなどを経て、ようやく昭和八年七月に本屏風を描き上げた。美人画や情緒ある下町の風俗を好んで描いた清方が、御慶事を祝う屏風の画題に選んだのが、皇居前の広場で楽しみに語らう女学生と、隅田川畔の船上で生活する母娘という対照的な二図であった。

左隻の背景に描かれているのは、関東大震災復興事業の一環として永代橋とともに建設され、清方が屏風の揮毫を命じられる前年の昭和三年に竣工したばかりの清洲橋であった。清方が残した本屏風の下絵を見ると、完成作とは異なって両隻とも人物は点景のように小さく描かれており、当初作者の意識の大半は、ドイツ・ケルン市のライン川に架かる吊り橋をモデルにした、この清洲橋という優美なデザインのを、皇居と並べて描くことに向けられていたと分かる。清方は、昭和という新たな時代の幕開けにふさわしいモチーフとして、震災後に近代都市として力強く再興した東京の象徴でもあった清洲橋を題材に選んだのだろう。そしてその河畔に停泊する船のバケツに活けられた桜の花と、右隻にたたずむ女学生が摘み取った蒲公英が、都会に暮らす人々に等しく訪れる暖かな春の気分を情感深く漂わせている。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

1920s-30s モダン・エイジ — 光と影の造型美

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 70

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 黒川廣子

発行 宮内庁

平成二十七年九月十二日発行

© 2015, The Museum of the Imperial Collections, Sanmonmaru Shozokan